

浅井っ子の宝トミヨ，調べ隊 富山県大門町立浅井小学校

学校の概要

学校規模

学級数：7学級（内特殊学級1学級）

生徒数：143人

教職員数：12人

体験活動の観点からみた学校環境

校区は、田園が広がる自然豊かな農村地帯と8年前に造成された団地からなっている。

近くを流れる庄川の伏流水や豊富な湧水が田畑を潤し、小川や用水では清流にしか生息しないトミヨ、ゲンジボタル、アシツキなどを見付けることができる。いずれの生き物も減少傾向にあり自然環境の保護が急務となってきている。

校舎は、木登りのできる木々に囲まれている。敷地内には、水遊びのできる用水が流れ、井戸水が自噴している。

連絡先

〒939-0254

富山県射水郡大門町島1386

電話：0766-52-0723

FAX：0766-52-6773

ホームページ：

<http://www.tym.ed.jp/sc145/>

電子メール：asai-es@tym.ed.jp

体験活動の概要

活動のねらい

地域に生き残る貴重なトゲウオ科の淡水魚トミヨの生息環境や生態を調べ飼育する活動を通して、課題を解決する力を高めるとともに、地域の自然を守り育てていこうとする心や態度を育成する。

主な活動内容・方法(位置付け・期間等)

近くの川や用水でのトミヨの捕獲

トミヨに関する調査及び飼育・観察

トミヨに関する情報発信

(総合的な学習の時間35時間+課外)

体制等の工夫

捕獲活動を行う現地では、担任外教員を加え、教育ボランティアとも連携する。

調べ活動の場で、県の文化財課や庄川沿岸漁業協同組合等との連携を密にする。

体験活動の成果が実感できる発表の場の確保のため、地域団体との連携を図る。

活動の成果等

児童や地域住民の全体にトミヨや地域の自然に対する関心が高まっている。

この学習を契機に、地域の自然とかわる活動が次々と展開してきている。

情報活用・発信能力が向上している。

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

ア 地域に生き残る貴重なトゲウオ科の淡水魚トミヨの生息環境や生態を調べ飼育する活動を通して、地域の自然を守り育てていこうとする心や態度を育成する。

イ トミヨに積極的にかかわり、課題を見つけ追究する活動を通して、情報の集め方や、調べ方を身に付けるとともに、地域の自然に対する自分なりの考えをもつことができる。



巣作りをするトミヨ

(2) 全体の指導計画



「トミヨの里ミニ広場」建設中

- ア 活動の名称 「浅井っ子の宝トミヨ，調べ隊」
- イ 実施学年 第3・4学年
- ウ 活動内容 トミヨの捕獲，飼育・観察
情報発信活動，他校との交流
- エ 教育課程上の位置付け
総合的な学習の時間（35時間）＋課外
- オ 実施時期 6月～11月
- カ 活動場所 地域の小河川や用水
自然観察池周辺

キ 継続の状況

生き物やそのすみかである水環境について調査や飼育等の体験活動を行うとともに、学習の対象をさらに多くの水辺の生き物に広げるため、引き続き本活動を発展させ「浅井の生き物ガンバレ応援隊」として実施することとしている。

2 活動の実際

3月、3年生が、県内の小学校とサケの飼育状況や飼育方法について情報交換をする中で、その学校がトミヨの飼育も行っていることを知った。トミヨは、本校が地域学習の一環として活用している「浅井カルタ」(昭和63年自校作成)の1枚「水清しトミヨ巣つくる親おやじ司川」に詠まれている魚でもあった。昔、川に入るとトゲで手足が痛くなるほど多くいたと言われるが、最近では絶滅危惧種になっている希少な魚である。「トミヨなら浅井にだっているよ。」との子どもの声に、教師が「サケを放流したらさみしくなるね。今度は、トミヨを飼育してみようか。」と提案した。トミヨは天然記念物でもあり、教材化に当たっては県の文化財課の許可を得た。

4月、新3年生・4年生合同で実際にトミヨを飼育している学校を訪問し、トミヨの飼育方法について見学した。トミヨの飼育に具体的な見通しが見えてくるにつれ、教師も子どももトミヨ飼育への関心を高めた。5月、子どもたちは、連休を生かして思い思いにトミヨを探し始めた。その結果、様々な場所でのトミヨの生息情報が各学年の子どもたちから寄せられた。トミヨに対する関心の高まりに合わせて、6月より「浅井っ子の宝トミヨ，調べ隊」を結成し、複数の教員で子どもたちの多様な追究課題に応えるために3・4年生合同の総合的な学習を進めることにした。

(1) 事前指導及び準備

- ア 他校との交流やトミヨの捕獲活動の中から生まれた課題を互いに出し合い整理する。
- イ 学習カードに調べたいことを書く欄を作り、それをもとにグループ編制を行う。

ウ 誰がどんな方法で調べるかを記入した計画書をもとに，調べ学習がスムーズに行われるような学習環境を整えたり，児童の相談に乗ったりする。

- (ア) 授業に参加される県の文化財課の方との質問事項の打合せ
- (イ) 検索方法やナビの入力などインターネットの活用指導
- (ウ) 図鑑・資料や道具の整備，観察・実験方法の確認
- (エ) インタビューの仕方についての指導



(2) 活動の展開

ア みんなでトミヨをつかまえよう



小川での捕獲作戦撮影中

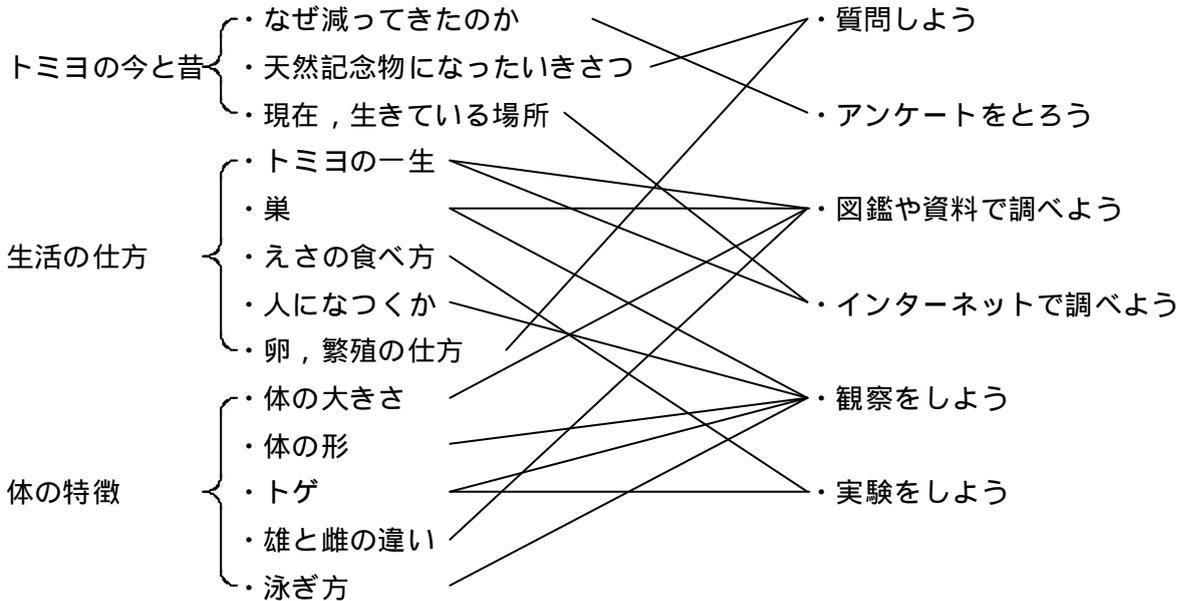


団地周辺の用水での捕獲

イ トミヨについてもっと知ろう

<学習内容>

<学習方法>



県の文化財課の方に質問しよう



インターネットで調べよう





トミヨの飼育・観察が始まり、その生態や生息環境などについての学習が深まっていった。6月末には、水槽内において巣作りするトミヨの姿を確認するなど、子どもたちは、飼育・観察しながら一つ一つ気付きを増やしていった。しかし、夏には水温管理の甘さ、水槽の大きさに適した数の未調整、1年といわれる寿命などから、当初50匹いた水槽内のトミヨが9月には3匹しか残らなかった。この経験が、何とかトミヨを育てて増やしたいという活動への意欲につながっていった。

「浅井っ子の宝トミヨ，調べ隊」の学習は全校への広がりを見せ、トミヨが自由に泳げる広い池があればよいとの願いから、9月には、全校児童の手づくりによる自然観察池が完成した。現在、観察池ではトミヨが自然孵化を繰り返し、池の中のヨコエビをえさにその数もかなり増えてきている。

ウ 学習したことを伝えよう

グループごとに模造紙にまとめ学年発表会を行う。

祖父母や地域の高齢者を招いて行う寿感謝集会で学習の成果を発表する。

交流校の友達にレポートを送る。

まとめの発表会を終えて、右下のような「トミヨふりかえりカード」を用い、自分のよさや成長に気付くことができるようにした。



トミヨふりかえりカード	
年	名前
ファイルを見直して、自分が成長したと思うことを書きましょう。	
①	調べ方の成長
②	友達と教えあったり、協力する態度の成長
③	トミヨについての考えの成長



(3) 事後指導

課外の時間での飼育・観察を日常化したことで、巣作りの様子、産卵期の動き、体色の変化など、図鑑や資料などで調べた事柄を実際に確認することができた。子どもたちは、そのことを全校に放送や掲示物を使って発表し、更に関心を持續高揚させていった。

3 体験活動のための体制

(1) 学校の体制、家庭や地域、関係団体・施設・機関などとの連携

ア 児童が飼育・観察しやすい環境を整えるために、保護者の協力も得て3つの大型水槽と自然観察池を整備した。校区が庄川の湧水地帯であることを生かし、いずれにも水温を一定に保つことのできる井戸水を流している。大型水槽へは、ポンプでくみ上げた井戸水を手作りサイフォンを使って流し、自然観察池には、自噴の井戸水が流れ込むように配管した。

イ 児童の関心が徐々に専門的なものになってきたので、校区内にある庄川沿岸漁業協同組合、県の文化財課など、地域人材・外部講師との協力体制を整え、授業への参加、資料提供や取材協力などを進めている。

ウ 飼育・観察や活動の記録などを保存活用するため、視聴覚及び情報機器の整備に努めている。現在、3年生以上のほとんどの児童が、デジタルカメラやビデオカメラを自由に操作できる。

エ 児童が活動の成果を他から認められ充実感を味わうことができるように、ホームページなど情報発信する場を整えている。また、児童が累積したトミヨの記録写真や映像を、校内の学習センターに集積し、学校の財産として様々な活動に生かしている。

(2) その他

ア トミヨの捕獲にあたっては、川の植生や魚礁などを傷つけたり乱獲したりして、川の状況に大きな変化を与えないように細心の注意を払った。

また、水量や透明度などを考慮し、天候や増水情報などを把握するとともに地域の人の意見も参考にしながら日時を決めた。

イ 校外の活動場所への移動は、安全と時間の短縮を考慮し、町役場の協力を得て町のバスを利用している。

ウ 大型水槽など設備費は、財団からの助成金で賄った。えさ代など飼料費及び光熱水費などは、町費で賄っている。

4 成果と課題

(1) 成果

ア 児童が、情報を発信することによって、地域の自然に対する関心を一層高めているとともに、地域住民の意識の中にも、トミヨが大切な生き物として再認識されてきている。

イ トミヨの継続的な飼育・観察によって、水辺の生き物が育つ地域の水環境を、自分と深くかかわりのあることとして受け止めるようになった。課題への取り組み方もより積極的になってきている。

ウ 調べ活動や様々な情報発信を通して、多様な見方や考え方、まとめ方や伝え方、相手を意識した話し方など、主体的に学ぶ力の育成に効果を上げることができた。

エ トミヨの生態を学ぶことを通して、トミヨが生き続ける自然環境を大切にしようとする心情とともに、トミヨの棲む郷土への愛着と誇りが育まれてきている。

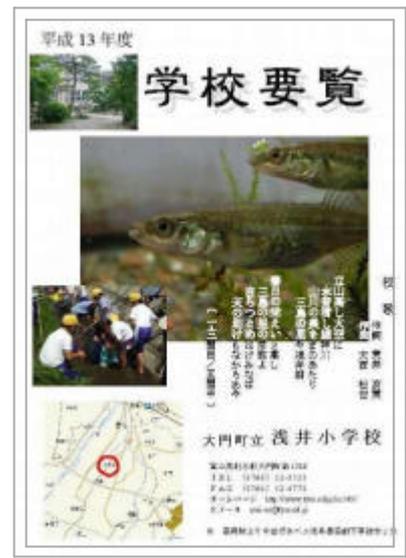
オ トミヨの飼育・観察が契機となり、自然観察池の造成やトミヨの里ミニ広場構想、地域の環境保護活動、他の水生生物や植物の飼育・栽培と次々に活動が発展している。また、トミヨを題材とした造形活動など教科の学習との連携も進められている。

(2) 課題

ア 複数学年が合同で学習する場合、教科の基礎・基本との関連を学年に応じて明確にした上で、児童にとって無理や無駄のない展開を工夫することが大切である。

イ 児童の関心や疑問は、直接体験を重ねるほど多様化していく。調べ活動のための学習環境をより一層充実させるなど一人一人に応じた対応を工夫する一方、課題を類型化しグループで解明していく学習過程の在り方を工夫する必要がある。

ウ トミヨの飼育・観察の中から新たな課題が生まれ、更に活動が発展していくように、児童



4年生児童撮影のトミヨを表紙に生かした学校要覧

の小さな発見や何気ないつづやきにも大きな可能性を見いだしていく教師の構えが大切である。

エ 複数の教員や外部協力者によって指導に当たる場合、留意事項や児童へのかかわり方などについて共通理解を図ることが大切である。

5 今後の取組の方向

- (1) 町の子ども議会で提言した「キッズワールド；トミヨの里づくり構想」の先駆けとして、子どもたちは、自然観察池を「トミヨの里ミニ広場」に整備しようとしている。この動きを生かし、今後も「水と生き物」を学習の中核のひとつに据えていきたい。
- (2) 現在は、トミヨを中心に11種類、200匹以上の水辺の生き物を飼育している。今後は、子どもの手による「キッズ建設ウォータープロジェクト」活動を支援しながら、観察池をより自然に近い状態へと改善していきたい。また、湧水を生かしアシツキなどの水生植物の栽培活動も充実させていく予定である。
- (3) 地域の環境を生かした水辺の生き物の飼育・栽培活動を、教育課程に位置付け、一層推進するとともに、小規模校の特色を生かした全校での取組や、他校との学習交流なども活性化させていきたい。
- (4) 学校では、児童がデジタルカメラでとらえた身近な水環境や水辺の生き物の姿を収めたオリジナルポストカードを作成し、地域の全戸に配布した。今後もホームページや各種便りを通して情報発信に努めたい。また、「浅井の人と自然を教材とする学習アドバイザー会議」を行い、体験活動の計画段階から地域の団体や人材と連携を図っていく体制を整える予定である。地域の人と地域の宝を掘り起こしながら、子供たちの郷土への愛着と誇りを一層育んでいきたい。

【本事例活用に当たっての留意点】

児童が体験活動を通して学習する際に意欲的に取り組める条件の一つは、その活動が社会に貢献できる活動であることである。本事例においては、天然記念物に指定されているトミヨを題材にすることで児童の関心・意欲を高めることができた。また、トミヨを飼育し、生育環境や生態を調べた結果を地域に発信するによって、地域住民のトミヨに対する認識が深まり、児童はこの活動を誇りに思い、一層意欲的に活動することができた。

このような取り組みを確実に行うためには、教職員のトミヨなどの題材に対する認識を深めること、学習指導の要点を明確にすること、関係者や専門家との連携を確かなものにするなど体制づくりを図ることが大切である。

本活動は、児童の声をすくい上げたり、児童の関心を基準にしたグループ編制をしたりするなどの取組によって、学習活動に広がりのある体験活動になっている。